

Phantom Quest SpinOff-07.

[王位継承順位第1位の話]

「クラヴィス様ー！ クラヴィス様ー！」

私を探す従者たちの声が城中に響き渡るのとははや日課になっている。

「今日は気付かれるのが早かったなあ」

残念だ。ゆっくりこの木陰で読書を楽しもうと思ったのに。

かと言って逃げ隠れする気は毛頭ないので、間もなく「ここにいらっしゃいましたか！」と見つかり部屋に戻されることだろう。

そして読んでいた本（情事がなかなか過激に、実に生々しく描写されている作品＝私は素晴らしい芸術作品だと思っているが、なかなか周りに理解されない）を取り上げられて小言を言われるだろう。

ふう…と一つため息を吐いて、背もたれにしていた木を見上げる。

私の父が生まれた時に植えられたフォルティヒというその木は、極稀に真っ赤な実をつける。実が生ること自体がかなり珍しいことから「幸運の実を生す木」と言われてきた。その実は国を繁栄させるという言い伝えがあり、痩せた地に埋めると瞬間に土地が肥えるという。つまりは食用ではない。

だからその実の味…は私も知らなかった。

あの日まで。

× × ×

孤児院視察への同行。

私は…11歳か12歳か。

「これは任務だよ。クラヴィス」父にそう言われたのを覚えている。

「私が視察している間、彼らと遊んでいるといい」

祖父の急死により若くして王位に就いた父にくっついて、私は幼いころから色々な場所に出向いていた。遊べと言われても…。

孤児院の子供たちは3歳から14歳まで。おそらく30人程いたと思う。

急にやってきたやたら身なりのいい私と、誰が快く遊んでくれるものか。

そう、思っていた。

「ねえ」

ふいにかけられた声には私は振り向く。

明るめの栗色のふわりとした髪の小さな男の子が、興味津々の目で立っていた。

「なんだい？」

「あんた、ほんもののオージなの？」

「そうだよ」とうなずくと、「すっげー」と大きな口が笑った。

なんてしあわせな笑顔だろう…。それが彼への第一印象だった。

今思えばなぜ名前を聞かなかったのか？ 不思議だ。

でも必要がなかったんだ。仲良くなるのに名前もそのほかの情報も何も必要なんてなかった。

彼は私を「オージ」と呼び、私は彼を「君」と呼んだ。

おそらく5歳くらいか？ それくらいに幼い彼はとにかくよく笑った。けらけらと。

私もつられてよく笑った。こんな風に大きな声をあげて笑うなんてお城の中では許されないと思っていた。いやきっと誰も咎めはしないのだろうが、それでも憚られた。

「そうだ！！オージにだけおしえてあげる！！」

突拍子もなく彼は私の手を引き、駆け出した。

「ちょっ…待って」

すっぽりと私の手の中に収まる小さな手が可愛くて、胸がぎゅんとなった。

彼に連れてこられたのは孤児院の裏庭の奥。草木が風に揺れている。その中の一つを彼は見上げた。

「この木ね、こーうんの木なんだって！」

『こーうん』が『幸運』だと気付くには少し時間を要したが、私はその木を知っていた。

「フォルティヒ…」

「そう！！それ！やっぱオージはなんでもしってるんだね。すっげー」

「お城にもあるんだ。父が生まれた時に植えられたこの木が。…これは随分と立派だね。なかなかここまで育つのは難しいと言われている木なんだよ」

「えんちょうせんせいもそう言った。とっってもこーうんな木だからだいにしなきゃだめだって。この木がみーんなのしあわせをやくそくしてくれるんだって」

そう言うと彼は木の幹にしがみついた。

「だからぼくいっつもこーやってしあわせをもらってるの」

すると手招きをして彼は言った。「ほら！オージも！」

私は言われたように幹に手を回す。しっとりとした木肌が気持ちいい。

二人して幹にしがみついているという不思議な図。そう思ってふっと笑いが込み上げる。

なんて、穏やかな時間だろうー…。

「そういえば、私にだけ教えてくれると言うのは何のことだい？」

そう問うと彼はにこーっと笑って、ひょいひょいと木を登っていく。随分と身軽だ。

「オージものぼってこれる？」

木登りはほぼ初体験のようなものだった。昔登ろうとして「おやめください！」と止められたことを思い出す。

小さな手が手招きをするので、登らずにはいられない。

私はどうにかこうにか彼が跨っている枝まで登った。

視界が少し広がり、風が髪を掠めていく。気持ちがいい…。

「ほら、これ」

彼が指さした先を見ると、小さな赤い実が生っていた。

「これは…」

「こーうんの実だよね？」

私も見るのは初めてだった。

「あれ？　こーうんの実じゃないの？」

答えない私に彼は首を傾げた。

「いや、君の言うとおりだよ。これは幸運の実だ」

「やっぱり！！」

本当に大きな口で笑うんだなあ。

「ふふ。おいしそうだよねえ」

ごくりと唾をのむのが聞こえた。

私は笑って答える。

「残念ながらこれは食用ではない」

「しょくよう？」

「食べるものではないんだ」

「どうして？」

あまりに素直な問いに、私は一瞬戸惑ってしまった。「どうして…」と問われてしまったら…

「…この実は幸運をもたらす貴重なものだからね。この実の力が必要だと思われる場所に植えてその土地を肥やす…」

まあいい目が「？」と訴えかけてくる。

「あ、すまない。…とにかく、これは食べるものではないんだ」

「えっと…つまりオージはたべたことないんだね」

「そうだよ」

すると彼は赤い実をじーっと見て言った。「じゃあ…」

「おいしいかどうかわからないってことか」

「…そうなるね」

「だったら、たべてみよう？」

「え？」

そう言うが早いかな、彼はその赤い実をもぎ取ってパクリと半分口にした。

「え！！　ううわっ！！」

驚きすぎてバランスを崩し枝から落ちそうになった…のをどうにか耐えたのは褒めて欲しい。

「あっぶなーい！　…もぐもぐ…オージ…もぐ…だいじょうぶう？…もぐもぐ」

モグモグしながらおかしそうに笑う彼。

「はいオージ」

大きな一口分齧られた赤い実。小さい手のひらの上で赤く艶めいている。

「あまくてすっぱくて…うん。おいしいよ」

「……」

好奇心には勝てないものだ。私の手はその赤い実を己の口へと運んでいた。

食感はトマトに近く、味はザクロが一番近いと思った。独特の甘みと酸味が口に広がる。

何だろう。この背徳感の味。その甘い香り。

目の前の彼は「どう？」と私の顔を覗き込んでくる。

「そうだね。おいしいよ」

「だよねー？」

彼はにまーっと笑った。

「ぼくたち、こーうんの実をたべちゃったね」

「食べてしまったね」

「怒られる？」

「誰にだい？」

「うーんと、えんちょうせんせい？」

「私はもっと偉い人に怒られてしまうかもなあ」

「…そのときはいっしょにあやまろうね」

今になって困った顔をするのはずるいと思うぞ。

私は苦笑しながらそのふわりとした栗色の髪をそっと撫でた。

「大丈夫さ」

「え？」

「幸運の実を食べたんだ。きっと私たちは運が良くなったはずだ」

「あ！たしかに！」

彼は目を輝かせてうなずくと、ひょいっと木から飛び降りた。本当に身軽だな。

私がゆっくりと下りて行くと、彼はまた幹にしがみついていた。

「それ、好きなんだな」

彼はこくりとうなずく。

「…あのね、きのもちようなんだって」

「え？」

「えんちょうせんせいに。すべてはきのもちようだよっていわれたんだ。いいこともわるいことも、どんなふうにもうけとめるかだよって」

「ああ、『気を持ちよう』か」

「ぼく、ぜんぜんことばしらないから、さいしょは木を持つことだとおもってたんだあ。んで、こうやってぎゅってしてみたらきもちよくて…」

「しあわせをもらっていると言ったね」

「うん。いっぱいいいっぱいもらってるんだ」

「そうか」

それはよかったな、と続けようとした時だった。彼の笑顔が少しだけ曇った。

「でもほんとうはね、もらってばっかじゃだめだなあっておもってるんだよ」

「？」

「いつかはしあわせをあげられるようになりたいなあ」

へへへ、と彼は静かに笑った。

その時気づいた。

これが…本当の彼の笑顔だ。少し自信なさげで、少し寂しそうで、それをぐっと耐えている笑顔。

それが、今の彼の本当の顔。

ここは、孤児院。

彼がどういう理由でここにいるのかは知らない。でも、彼はここにいる。

園長先生や仲間たちと一緒に。ここで暮らし、ここで生きている。

彼があまりにもくったくなく笑うから。

彼があまりにも純粋な目を輝かせるから。

忘れていた。…違うな。忘れたと思ったんだろう。私は。

「ここは、楽しいかい？」

思わず口からこぼれた言葉に血の気が引いた。

それは聞くべきではないことだったかもしれない。

いや、遠慮する方がおかしいのか？

「たのしいよ」

私の動揺をよそに、彼の真っすぐな答えが返ってきた。

それは嘘ではない響きを持っていた。少し、救われた気がした。

「でもね、もっとたのしいこともきっとあるんだっておもう」

「もっと楽しいこと…」

「うん。つまりぼくはこれから、もっともっとたのしいこととであえるってことでしょうか？ それってすごい！」

「……」

泣きたい気持ちになったのは偽善なのか？

彼に対して何か同情してしまったのか？

違う。…違うんだ。

彼があまりにも前しか向いていなくて、それが眩しくて…。

きっと羨ましかったんだ。

「どうしたのオージ？ おなかいたいのか？ さっきのこーうんの実、やっぱりたべないほうがよかったのかな？」

「いいや」

私は首を振った。

「君と会えてよかった」

彼はきょとんとしていた。

だけど、今の私には伝えられることがそれしかなかったんだ。

本当に、君に会えて、良かった…。

口の中に残った甘酸っぱい香りは、私と彼の秘密。

ずっとずっと心の中に留めておくべき…。秘密の思い出。

× × ×

「クラヴィス様… クラヴィス様！」

はっと目を覚ますと、従者Aの心配そうな顔が視界いっぱいに飛び込んできた。

「うわっ！」と思わずのけぞる。

「よかった。何度お呼びしても目を覚まされないののでどうかされたのかと心配しました」
従者 A はほっと胸をなでおろした。

「…寝ていたのか…」

どうやら木陰でうたたねをしていたらしい。

「またこんなものをお読みになっていたのですか？」

そう小言を漏らすのは従者 B。

「そう言うがな、読んでみるといい。なかなかおもしろ」

「クラヴィス様…」

従者 AB のジトリとした視線。

…嗚呼、やはり理解されないのか。すこし寂しいぞ。

「クラヴィス様。間もなくお時間です。ご準備を」

「本日は…」

起き抜けの頭で今日の予定を思い出そうとするより早く答えが告げられる。

「孤児院視察です」

「…そうだったな。すぐに準備する」

従者 A と B は一礼すると城へ戻って行った。

私はもう一度見上げる。この木も随分と立派になった。

まだこの木に赤い実は生っていない。

幸運の実が生らずとも、この国—テラ王国は平和を保っている。

間もなくの即位を控えた私に課せられたのは、テラ王国内の遺跡調査。

トレハンたち（主にフィーネ君の計算によるものだが）の活躍により、国内の遺跡の謎がいくつも解き明かされてきた。私が同行したクエストでは必ずと言っていいほど貴重な財産が発見されている。

父に「お前は随分と幸運なのだな」と言われた。

確かに、と思う。

「テラ王国は安泰だな」と肩に乗せられた手の重みを噛みしめ、その温かさに誓う。

ふと、口の中に甘酸っぱい香りが広がったような気がした。

かつてのファントムクエスト—。「テンプス島の視察はお前に任せる」と父から命じられた責務。

決してハッピーエンドではないと思っていた。99.99%。

だが今思えば、あのクエストで『王国の秘宝』がこのテラ王国に戻ってきた。

それはとてつもなく幸運なことと言える。

そういえば、0.01%の可能性でハッピーエンドを信じた青年がいたね。

「きのもちよう」

そっと木肌に触れてみる。しっとりとして少し冷たい。

しがみついて目を閉じる。

薄い臉に当たる木洩れ日。彼の柔らかな栗色の髪と小さな手のひらを思い出した。

あの日の「こーうんの実」は、私の体の中に確かに息づいている。

では、その実の半分を口にしたあの彼は――……？

「クラヴィス様ー！！」

遠くから少し苛立ちを含んだ声がある。

もうこれ以上待たせてはなるまい。

私は城へ急いだ。

× × ×

「旅一座？」

「毎年必ず来てくれるんですよ。子供たちも楽しみにしているんです」

とにこやかに語る園長。

「今年は特に面白いから期待しててね、と伝言をいただいているので、私も今から楽しみです」

と園長が取り出したのは、見覚えのあるチラシ。

――…バルト一座最新作『ファントム・クエスト・エボリューション』

SpinOff- 07. fin.